

## ヒトエグサ種苗保存技術の確立

中村 勇次

### 1. 目的

ヒトエグサは、味噌汁等によく利用されており県民にとってはなじみの深い海藻である。しかし、その養殖については天然採苗に依存しており、依然として不安定な生産を余儀なくされている。安定生産を図るには、モズクのような人工採苗手法及び種苗保存技術の確立を図る必要がある。よってヒトエグサ採苗及び夏期の種苗保存を行い冬期の養殖に向けた人工採苗を試みた。

### 2. 方法

5月24日に北中城地先より採取してきたヒトエグサ母藻を滅菌海水で数回洗浄してから軽く絞って広げ、乾燥させながら2日間暗処理を行った。その後、滅菌海水中に投入し、約7,000ルクスの人工光を照射し、母藻より配偶子を放出させた。配偶子が接合したのを見計らって黒ビニール袋で覆いをし、付着板を投入して1回目30枚、2回目15枚の計45枚の付着板に接合子付けを行った。接合子が付いた付着板は、タカラ培養液・モズク用培養液（栄養塩、ビタミン、アミノ酸）を組み合わせた培養液でそれぞれ保存した。

### 3. 結果

5月下旬に採取した接合子は、最初約10ミクロンであった。6月中旬には約15ミクロンになったが、タカラ培養液及び栄養塩を入れた実験区では雑藻類が繁茂し、7月から数回淡水処理を行ったが糸状になった藍藻類が駆除できなかった。そのまま、10月まで培養を続け、10月20日に低温処理を行い、23・25日に遊走子放出を試みたが放出は見られなかった。接合子の

中には藍藻に覆われて成長が止まってしまったものも見られた。

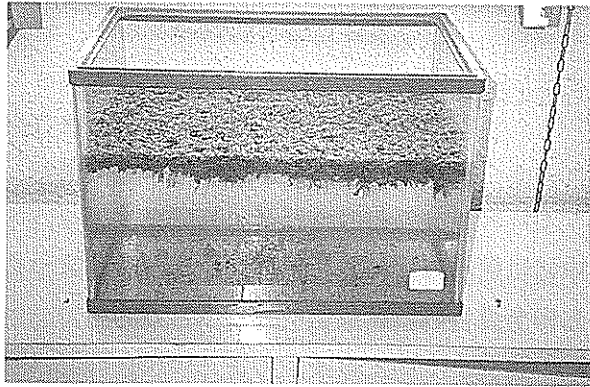
### 4. 考察

今回のヒトエグサ種苗保存では、淡水浴による雑草防除では不十分であったため、初期の除草剤（グラモキソン等）による処理が必要であると思われる。また、栄養塩類を投入する時期についても今回は早かったため、先に雑藻類が繁茂してしまった。特に藍藻類については、淡水浴での駆除が難しいため、初期の除草剤による処理、後期の定期的な淡水浴組み合わせることにより雑藻類を防いでいく方が良いだろう。

しかし、今後この作業を実際に漁業者が行うとなると、養殖網の枚数にもよるが、非常にたくさんの付着板を越夏保存しなければならず、大変手間がかかるため、さらなる改良が必要である。



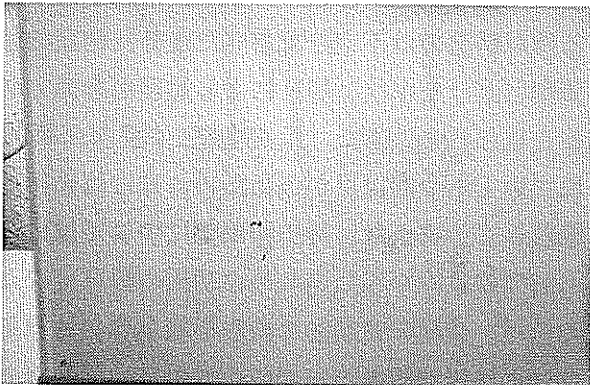
母藻を採取した北中城地先



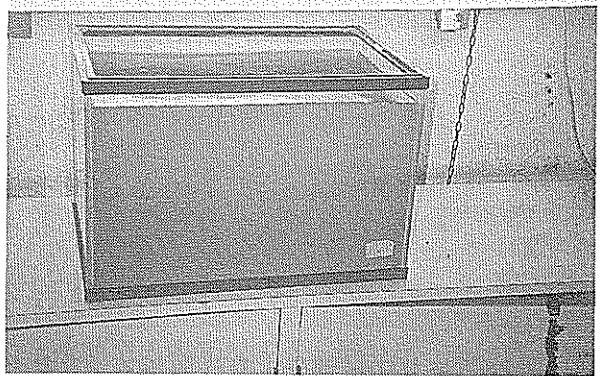
暗処理した母藻を滅菌海水へ投入



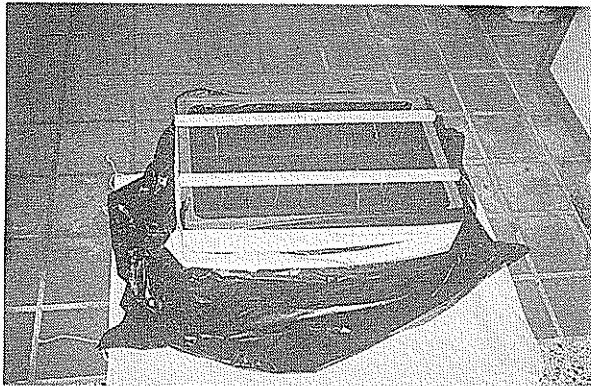
しばらくすると配偶子を放出し海水が緑色になる



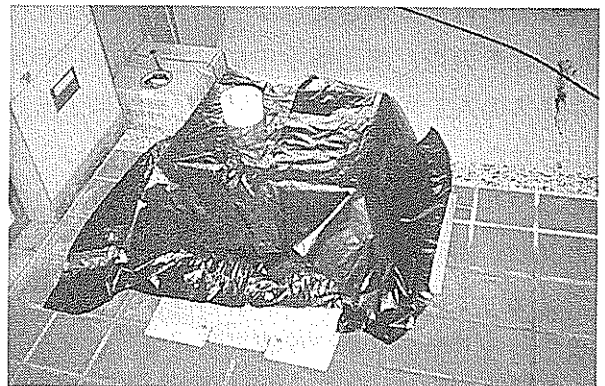
放出されている配偶子



母藻を取り除きしばらく配偶子を接合させる



付着板を投入し接合子を付けるため黒ビニール袋で覆う



黒ビニールで覆ってしばらく接合子付けを行う



付着板の培養の様子